

| | |
|---|---------|
| 氏名 | 小島 剛 |
| 職位 | COE 研究員 |
| <p>研究概要</p> <p>先端生命科学技術が、我々人類にとって大きな便益をもたらす可能性がある反面、それが大きなリスクをももたらす可能性が出てきているということが申請者の研究の背景にある。これについては、DNA 塩基配列決定完了（及びそれによるポスト・シーケンス時代への移行）、幹細胞をめぐる著しい研究の進行、代理母・代理出産の普及等の事例から理解できる。その生命科学そのものの内容が重要であることは以前から認知されてはいたものの、このような生命科学が引き起こすリスクとそれを受け入れる社会との関係については研究が進んでいるとは、一般には言いがたい。</p> <p>特に上述のような生命科学と社会との関係においては、この科学技術をめぐる従来の社会環境が、今日の急速な科学技術の進歩についていけていないことが、問題として挙げられよう。DNA 塩基配列決定完了に伴うポスト・シーケンス時代への移行、さらにその先の臨床医療への応用や、iPS 細胞の発見に代表される、幹細胞の研究の進展、さらにその先の移植医療や生殖医療への応用、代理母・代理出産等は、生命科学に関する規範の樹立という極めて重要な課題を我々に突きつけている。</p> <p>本研究者は、このような問題を前にして、どのような対策が可能なのかについて、いくつかの論文発表や学会発表を行った。以下、下記業績リストの中にある番号に従って、順に本研究者の 2008～2009 年度の研究概要をまとめる。</p> <p>本研究者は、1～3 において、現在の科学技術全般を、科学技術のもたらす利便だけでなく、リスクの観点からまとめ、市民の参加を重視する共和的政治体制によって、科学技術のもたらすリスクに関して決断していく、望ましい政治的意思決定を模索した。また、1～3 において抽象的にまとめられた思想を、4 において、幹細胞をめぐる世界各国の規範の状況を整理した後で日本の取るべき幹細胞研究の規範の在り方を模索した。業績 4 は業績 1～3 の具体例となっている。この中で本研究者は、iPS 細胞の樹立などによって勢いづいている発生生物学の実験・臨床応用に資する、社会科学的研究を発表した。</p> | |
| <p>業績リスト</p> <p>論文 1. 小島剛「リスク社会」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス』世界思想社 189-198 頁、2008 年</p> <p>2. Kojima Takeshi, “Empowering the Public through Scientific and Technological Social Groups”, Wako Asato and Kaoru Aoyama, eds., Reconstruction of the Intimate and Public Spheres Proceedings of the 1st Next-Generation Global Workshop, 2009, 233-245.</p> <p>3. 小島剛「科学技術とリスク」吉田純・杉万俊夫編『現代産業システムの新リスク学ハンドブック：第 3 編 社会システムと産業技術』ミマツコーポレーション 141-155 頁、2009 年</p> <p>報告 Kojima Takeshi, “The International Circumstances of Stem Cells in the World and Japan” Second Next-Generation Global Workshop, at Kyoto University, November 21, 2009.</p> | |

